

# 「祝の歌」——『和漢朗詠集』より

土橋靖子

Yasuko Tsuchihashi

本作は『和漢朗詠集』の「祝」より、漢詩二句と、和歌一首を、それぞれ慶事の意味に合わせ、金銀の扇面に書いたものである。

『和漢朗詠集』は、国風文化の流れを受けて、一〇一七―二一年頃に、文学作品として秀逸な漢詩や和歌を、内容ごとに整理、編纂されたもので、詩会その他、公私の様々な場面で朗詠されたものが書かれている。

現存する零本や断簡も多く、仮名古筆の学書にも、伝藤原行成筆御物粘葉本、伝藤原行成筆御物雲紙卷子本、伝藤原公任筆御物卷子本、藤原伊行筆葦手下絵卷子本など、よく取り上げられている。

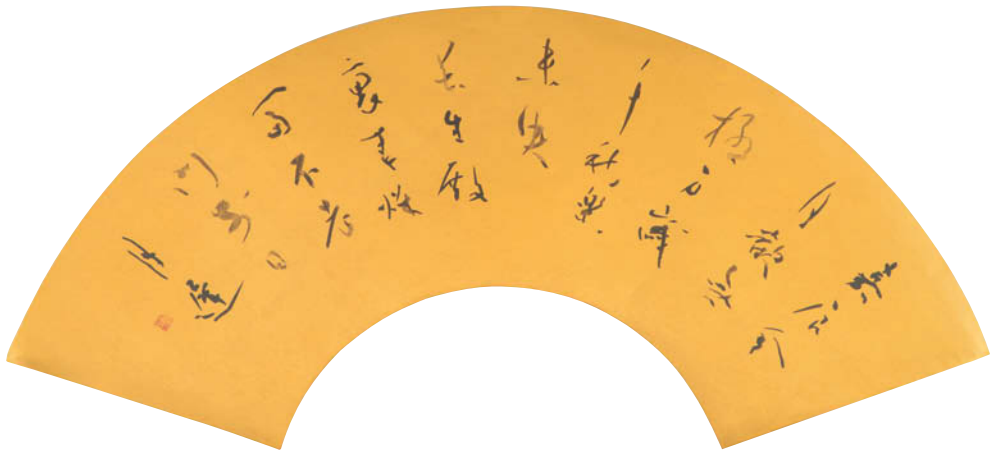
今日、書の一つの分野である漢字仮名交じりの書が着目され、新傾向の書として、これからの進展が期待されているが、いま必要とされている「読める書」であるか否かは別として、漢字と仮名が見事に融合されたこれらは、漢字仮名交じり書の原点と言えるのではないかと思う。

ただ、これらに見る漢字部分については、おしなべて行成以降に完成されたと言われる和様の漢字の特質の、ある種の脆弱さを感じる。

そこで、私は、今回、金扇面の漢詩には、仮名の祖先ともいえる王羲之、また羲之の流れを汲む東晋から唐時代の行書の雰囲気を作る品に取り入れ、また銀扇面の和歌は、その草書的な味わいを含む草の仮名を多用して、これらの調和を試みた。

今後も、漢字古典、仮名古筆を礎にした、さまざまな表現をもとめつつ、現代に生きる漢字仮名交じり書への発展性も見据え、ひいては、ジャンルを超えた私なりの「日本の書」を追求していきたいと思っている。

参考文献・菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集）小学館、一九九九年



27×57.4cm

嘉辰令月歛無極  
 万歳千秋樂未央  
 長生殿裏春秋富  
 不老門前日月遲



26×57.8cm

わが君は千代に  
 八千代にさざれ  
 石の巖となりて  
 苔のむすまで